環境問題への社会経済学的アプローチに向けて

水俣病から学ぶべきもの

梅澤直樹
Naoki Umezawa
滋賀大学 経済学部 / 教授

I 序

私たちの経済活動は、資源の供給にせよ、廃棄物や廃熱の究極的処理にせよ、自然の力を基盤としてはじめて成り立っている。だが、少数の例外的研究を除いて[1]、経済学はせいぜい地代論において地力からの制約を意識するに留まり、自然の資源供給能力や浄化能力を安んじて前提しうるものとみなして、それらの基盤上での人間の営みに考察の焦点を合わせてきた。しかしながら、経済活動が高度な近代科学＝技術を駆使して行われるようになり、またその規模が途方もなく肥大化した現代においては、もはや自然の力をそのように前提しておくわけにはゆかない。このことに対して最初に多くの人々の注意を喚起したのが、1972年のローマ・クラブ報告『成長の限界』であった。

こうして、環境経済学は本格化して未ださほどの歴史を閲しているわけではない。だが、いまや主流派経済学のうちに確固とした地位を占めるようになり、ミクロ経済学的研究を中心として着実に実績を積み重ねてきている。とはいえ、主流派の環境経済学には、方法論的個人主義に立脚するがゆえに、環境問題の孕む経済・社会的構造への切り込みに物足りなさを禁じえないところがある。だからこそ、そうした構造的問題への鋭敏な関心を自らのレーゾン・デートルとするマルクス派経済学による環境問題の分析が注目されることとなる。

1）例外的な経済学の系譜にどのような人々がいるかを辿った労作として、たとえば、H.マルチネス＝アリエ、工藤秀明訳『エコロジー経済学』HBJ出版局、がある。また、限界革命トリオの一人W.S.ジェヴォンズが石炭問題というかたちで先駆的考察を展開していたこともしばしば論及されるところである。

2）「豊かさ」という表記には、カッコつきの豊かさという意味を込めている。但し、それは逆に言えば、現代社会にカッコつきではあるが豊かさという属性を認めるということでもある。体制を超えて「近代」という時代の特質を問い直すという場合にも、その特質が或る体制の下で帯びることとなる体制的特性に

しかしながら、マルクス派経済学の側も、現代の環境問題を経済・社会構造的視点から分析する用意を期待にたがわず備えているかと問えば、疑問なしとしない。たとえば、環境問題は弱者へのしわ寄せを随伴するが、マルクス派経済学はそれを十全に解析しうるものになっているであろうか。むしろ、その基礎理論がいささか硬直的に経済学的論理で閉じようとしていて、そうした問題を──具体的考察次元では取り上げていても──体系的には受けとめあぐねているところはないであろうか。

さらに、経済・社会構造的視点という場合、資本主義とか社会主義とかといった体制論的視点やそのもとでのより下位次元の諸構造が想定されることとなっている。だが、環境問題の場合、その根源に途方もなく肥大化した経済活動が横たわっていることを想起したとき、そしてそうした経済活動は価値増殖を求める資本の側が推し進めてきたばかりでなく、「豊かさ」[2]を追い求めてきた近代的消費者もまたこの規模肥大化の積極的な担い手であったことを顧慮したとき、体制を超えて経済成長を追い求めてきた「近代」という時代そのものを問い直すという課題が浮上してくる。もう少し言えば、J.ボードリヤールが「記号消費」というコンセプトを用いて明らかにしたように、「豊かな」社会の消費者たちが商品に求めるものはもはや単なる使用価値ではない。また、そうした消費のあり方は、社会のあり方そのものを変容させている。したがって、環境問題の打開策を探ろうとするなら、こうした消費のあり方、社会のあり方を俎上にのぼせなければならない。しかるに、マルクス派経済学は、資本主義的市場経済システムの歴史的特質こそ自らの考察対象であり、商品の2要因で言えば交換価値の側こそがそうした対象をなすという認識のもとに、使用価値を考察外に押し留めてしまってきた。その結果、消費者が商品に求める属性そのものが「豊かな」社会の到来とともにまさに歴史的、社会的に生成されてきた特殊なものであることが、把握されがたくなってしまっている。こうして、環境問題に取り組むには、マルクス派経済学自身がより学際的で柔軟な社会経済学[3]へと脱皮する必要があるのではないかと解されることとなる。

そこで、次節では、経済・社会構造論的にみると主流派環境経済学にはどのような問題点が孕まれていると解されるかにまず少し立ち入ってみる。そのうえで、うえに触れた2点をめぐって、日本における環境問題[4]の象徴として多数の人々の関心を集め、それだけに優れた研究や当事者からの鋭い問題提起を生み出してきた水俣病から私たちは何を学ぶべきなのかを、あらためて確認してみよう。最後に、マルクス派経済学は水俣病が突きつけている問題を受けとめうる契機を内包しているのか、あるいはボードリヤールを超えて「豊かな」社会の構造的解析を推し進めるとすれば、マルクス派経済学にはどのような独自の貢献が展望されうるのかといった問題について、若干検討を試みてみることとしたい。

目を配ることはもちろん必要である。
だが、その下に包摂されることで帯びる体制的特性を
理解するためにも、まず体制を超えて、
豊かな段階に到達した消費社会がそれ自体として
孕みがちな特質を認識しておく必要があろう。
ちょうど、経済世界は稀少な資源の配分、
したがって節約（エコノミー）ないし効率性を離れては
存在していないことを認識したうえで、
そうした制約からの締め付けが体制によって
どのような形態を纏い、どの程度の締め付けを
押しつけてくるかなどを考察するというように。

3）学際性ないし開かれた経済学という点を重視し、
その象徴として社会学との連携を示すべく、
政治経済学ではなく社会経済学という呼称を採りたい。

4）公害問題は局所的な場において加害者を特定できるし、
またそれは被害者とは峻別される存在でもあって、
この点で環境問題とは区別すべきという見方もある。
だが、第Ⅲ節において見るように、公害問題においては
加害者と被害者とは峻別されるという見方そのものが
問われうる。

Ⅱ 主流派環境経済学が孕む問題点

環境問題は主流派経済学に対しても一定の反省を促す契機をなした。すなわち、経済過程のうちには外部不経済つまり即自的には市場的評価に組み込まれないコストもまた存在するのであって、市場メカニズムに委ねておくだけで常に最適な解が得られるわけではないという事実を突きつけたのである。だが、この問題に対処すべく展開されてきた主流派の環境経済学は、支配的パラダイムの再考ではなく、むしろその枠内での補正、洗練をめざすものであった。

たとえば、外部不経済をどのような政策的手法で抑制するのがもっとも効率的かが探求され、直接規制よりも税や課徴金等を駆使する経済的手段を活用したほうが効率的であり、さらに排出量取引市場を創設してそこでの企業間取引に委ねたほうがいっそう効率的という結論が導出された。行政は、個々の企業が外部不経済の垂れ流しの是正すなわち環境汚染の削減に要する限界費用曲線の形状を把握しうるものではないから、直接規制を行おうとすれば、たとえば各企業とも一律半減といった硬直的な規制にならざるをえず、社会的な不効率を招く。むしろ、課徴金等の水準を決めれば各企業はそれに自らの限界費用が照応するまで汚染を削減するから、諸企業の限界費用は均等化し、社会的な効率性が達成される。但し、行政が個々の企業の限界費用曲線の形状を把握しうるものではないという点は変わるわけでなく、行政が決める課徴金等の水準が望ましい汚染削減量を的確に誘導しうる保証はない。課徴金の水準が高すぎて必要以上に汚染削減努力が積み重ねられたり、逆に課徴金水準が低すぎて目標の汚染削減が達成されなかったりすることもあろう。机上では、なんどか課徴金水準を手直しするなかで適正な水準を発見するという手続きも想定されうるが、現実には行政がそうそう朝令暮改を繰り返すわけにもゆかない。それに対して、行政が許容可能な汚染排出量の総量を決定してそれらを諸企業に配分し、あとは企業間の取引に委ねれば、いずれの難点も解決されるというわけである。

上記のように、この論議の要諦は次の点、すなわち行政は個々の企業が外部不経済の削減に要する限界費用曲線の形状を把握しうるものではないということ、つまり計画経済に対して市場経済システムの優位性を説くおなじみの論点の応用にほかならない。そこには、外部不経済という現象がそもそも市場経済システムの構造的ないしシステム的特性にどの程度深く根ざした問題であるのか、換言すれば外部不経済は市場経済システムの本質的派生物であって、この経済システムのうちに織り込む工夫を施してもまた新たな綻びを生み出すことはないのかといった論点に対する周到で粘り強い省察は見出されない。むしろ、外部不経済は市場経済システムにとって副次的、周辺的な問題でしかないという認識が一般的なのである。

だが、たとえば日本の産業廃棄物処理システムはフォーマルな世界とインフォーマルな闇の世界とが不可分に結びついていて、合法的に自らの廃

5）石渡正佳『産廃コネクション』WAVE出版、2002年、24−28ページなど参照。

6）たとえば、平田剛士「制動装置（ブレーキ）なきシステムが『無目的ダム』を作る」『週刊金曜日』編集部編『環境を破壊する公共事業』緑風出版、1997年、所収、を参照。

7）鷲田豊明氏は、「真実の」ないし「正しい」環境価値という問題設定そのものに疑問を投げかけ、だからこそ環境価値を推定するさいの「民主的な手続き」を徹底させることに賭ける。たしかに、環境の価値評価は常に特定の社会・経済的諸関係の下でしかなされえず、超越的な意味での「真実の」ないし「正しい」環境価値といったものは存在しないかもしれない。だが、対象地域を支配する社会・経済的諸関係がその国においてかなりに特殊なものであって、そのことが関係住民による環境価値の評価に少なからぬ影響を及ぼしているとすれば、推定された環境評価がその国なりの「正しい」

棄物の処理を委託したつもりでも最終処分場へ向けて廃棄物が流れてゆくプロセスのどこかで不法投棄ルートと融合するといったこともあると言われる[5]。まして、社会的分業を私的な主体が担い、それゆえ自らの生産物が売れ残るかもしれないというリスクを抱えて競争に凌ぎを削ることを本質的特性とする市場経済システムの下にある企業のなかには、こうした低価格で処理を引き受けてくれるのは廃棄物の流通過程のどこかで何かあるのかもしれないという懸念を心のどこかで感じなくはない場合にも、自らはあくまで合法的な処理を委託しているのだからと、そうした懸念を胸に封じ込んでビジネスに徹する誘惑に駆られるものも生まれよう。また、上述のような競争圧力の下で、法を遵守するより法の網を巧妙にかいくぐることに知恵を絞る企業も出てこよう。こうしてみると、排出量取引においても、どこかでインフォーマルな世界とつながっていたり、あるいは巧妙に法の網をかいくぐる知恵に長けているがゆえに、安価に排出量を販売する企業があらわれないともかぎらない。

さらに、既述のような要諦が諸経済主体間の関係にもひるがえって妥当し、完全情報という自らの立論の根拠を掘り崩して、最適解を求めるというアプローチの仕方そのものを揺るがしていることにも目を向けようとはされていない。

また、開発か保全かといった問題に直面する際に採られるのは費用便益分析という手法である。ここでは開発によって損なわれることとなる環境の価値をいかに評価するかが課題となる。環境には通常、市場価格が付与されていないからである。そこで、旅行費用法、ヘドニックアプローチ、仮想市場法（CVM=Contingent Valuation Method）といった手法が適用されることとなる。なかでも、アンケートを通じて環境の仮設的市場価格を人々に問うCVMはもっとも汎用的な手法であり、アンケートに際しての評価の偏向を防ぐための種々の工夫も積み重ねられてきている。だが、そもそも環境に対する価値評価は、諸経済主体の置かれている経済的・社会的環境によって左右されるところがある。たとえば、同じ自然環境であったとしても、それが過疎地域に立地しているかそれなりに経済的機会に恵まれた地域に立地しているかで、住民の評価は変わってくる。また、前者の地域で最初はダム建設に反対していた人々が、予備調査などで地域にお金が落ち、雇用機会が生まれるなかで当該環境に対する評価を下げることもあるわけである[6]。だとすれば、アンケートの設問の仕方などにいかに工夫をこらし、さらに手続きの民主性を確保したとしても、それらだけでは歪みのない環境の価値評価に到達することを保障されないであろう[7]。

こうして、叙上の2点のいずれからも、方法論的個人主義にのっとって対象が埋め込まれている構造的ないしシステム的諸問題を捨象していては、環境問題の十全な理解にも、解決のための確かな政策的提言にも接近し難いことがわかる。と同時に、そうした構造的ないしシステム的諸問題に鋭敏な関心を払おうとするのはまさしくマルクス派経済学の特質にほかならないことも容易に想起されるところであろう。じっさい、マルクス派経済学

環境価値からなにがしかズレていることを認め、
そのズレを多少とも補正する努力を試みるべきであろう。
さらに言えば、現代においては、
その国において特殊でなくとも
グローバルな視野ではどうなのかという観点からの検証が、
また時間軸を伸ばせば、現代という時代そのものが
特殊かもしれないという観点からの検証が
求められてよいでのではなかろうか。
ちなみに、後者は、加藤尚武氏の言う、
共時的参加者を前提とする近代民主主義の
限界に関わっている。
鷲田豊明『環境評価入門』勁草書房、
1999年、60－62、107ページ以下、
及び拙稿「環境問題の社会経済学的接近に向けて
―『自然の価値評価』を手掛かりに―」
『滋賀大学環境総合研究センター研究年報』第1巻、
2004年、を参照。さらに、加藤尚武『環境倫理学のすすめ』
丸善ライブラリー、1991年、第3章、をも参照。

に一定の影響を受けて展開されてきた類型の環境経済学は、外部不経済という問題が市場経済システムの本質に関わっていることにも、また環境問題が埋め込まれた経済的・社会的構造にも着目してきた[8]。

しかしながら、マルクス派経済学を基盤として環境問題にアプローチしようとするなら、旧来のマルクス派経済学そのものがいささか狭隘ないし硬直的であることを感じざるをえない。また、だからこそ、マルクス派経済学から一定の影響を受けて展開されてきた環境経済学の類型の代表者である宮本憲一氏はやがてマルクス派経済学から離脱し、また玉野井芳郎氏はマルクス派経済学からある程度自由になるなかで独自の環境経済学を切り開いてゆくことになったのではないであろうか。そこで、次節では、旧来のマルクス派経済学がいかなる点で狭隘であり、また硬直的であったかを端的に教えてくれる、水俣病についての優れた考察や当事者からの鋭い問題提起に目を向けてみることとしよう。

III 水俣病から学ぶべきもの

水俣病については既にきわめて多くの研究が蓄積されている。そのなかで、原田正純氏の先駆的著作をはじめとして、水俣病患者がさまざまな重層的差別に苦しめられてきたことはしばしば論じられてきた。すなわち、チッソの企業城下町の周縁者として、また自らの住まう地域共同体の内部において、さらに日本が国家的に推進しようとしてきた経済戦略との兼ね合いで、しかも九州の一隅という地理的条件によって加重されつつ、という具合である[9]。のみならず、一般に環境問題が被害の弱者へのしわ寄せを伴っていることは、問題の埋め込まれている経済的・社会的諸関係に関心を抱く人々には敢えて指摘するまでもないところであろう。にもかかわらず、以下で、石田雄「水俣における抑圧と差別の構造」において展開されている考察に少し詳しく立ち入ろうとするのは、そこにチッソの企業城下町等々といった水俣病に固有の特殊的構造問題に留まらない、むしろ資本主義経済システムの一般的特性に通じる、したがって原理論的にも対象化されてしかるべき構造的問題が把捉されていると解するからである。

すなわち、同論文において石田氏は、水俣高校定時制に通う或る生徒の書いた作文をめぐる事件について紹介している[10]。かの生徒が校内弁論大会で優れた評価を受けて水俣高校定時制代表として熊本県の定時制高校文化大会に出場したところ、県はその発表内容に患者に対する差別を認めて『文化大会集録』に収載しなかった。それを水俣高校があらためて卒業記念誌の冒頭に掲載し、定時制生徒の全家庭に配布したので、患者生徒が問題にしたという事件である。その紹介のなかで筆者にとって興味深いのは、石田氏がこの事件に対する若い患者の鋭い省察を通じて、「抑圧移譲」という問題を焦点化したことである。

その若い患者は、金目当てに進んで水俣病になろうとした者もいるという、患者の苦悩にまったく無理解な差別発言に心底憤りつつ、冷静にそうした発言が生まれる背景を省察しているのであるが、そこに「定時制というそれ自身差別されているが故

8）たとえば、マルクス派経済学から出立して日本における環境経済学を切り開いていった宮本憲一氏は、なにより公害現場に立ってその具体的社会・経済構造に目を向けることを重視し、都留重人氏の「素材と体制」論を補完して「中間システム」範疇を提起するとともに、外部不経済を市場経済システムの本質的要素として追求したK.W.カップの社会的費用論にいち早く注目していた。
たとえば、宮本憲一『環境経済学』岩波書店、1989年（新版 2007年）参照。
さらに、佐和隆光・植田和弘編『環境の経済理論』岩波書店、第1章、第3章、2002年、及び植田和弘他編『環境経済学』第5章、第6章、有斐閣ブックス、1991年、などをも参照。

に逆にひどくなる差別感」の次のような鋭い剔抉を石田氏は見出した。定時制の生徒からすれば、昼間働いて夜間に登校するだけでも大きな負担なのに、職場では早く退勤することで白眼視され、学校では遅刻を責められる。しかも、仕事は低賃金できつい。「自分より下に踏みつける連中でも見つけないと、とてもじゃねえけどやってゆけん」。にもかかわらず、その踏み台だった患者やその家族が補償金を得て高価な新車やバイクを享受しているのを目にすると、パニックを起こすこととなる。つまり、今度の事件は、定時制が「せっぱつまってる」ことの証しにほかならない、と。

さらに、この若い患者は、後日の教頭とのやりとりを経て、差別に鈍感な人々の思想を次のように解析している。水俣病患者ばかりでなく民衆なら誰でも苦しい、それが世間だ。しかし、みんなじっと耐えている。それなのに、我が儘に騒ぎ立てて高額の補償金をふんだくる患者たちは許せないと彼らは考えているのだ、と。くわえて、「彼等が下積みのさ、底辺であればある程」許せない気持ちが嵩じる。したがって、「行きつくところは必ず弱いもんどうしのいがみ合い、つぶし合い」にならざるをえない、と。

こうして、彼は、ほんとうの問題が「民衆の内部」にあること、「貧しいものが追いつめられた時、何故いつも手を握り合わねえのか、何故助け合えねえのか」という点にあることを捉える。のみならず、自分たちの傷が今なおうずくのも、権力によって手ひどい扱いを受けたからではなく、「部落の、最も親しかった人達によって切られた傷だから」であることにあらためて想到するのである。

こうした若い患者の省察に、石田氏はかつて丸山真男氏が「抑圧移譲」と名づけた事象の鮮やかな対象化を見出す。水俣病は、単に弱いものへのしわ寄せというばかりでなく、弱いものどうしでのいがみ合い、つぶし合いを内包していた。しかも、それは若い患者による差別に鈍感な人々の思想の解析にあるように、人々の間に格差や抑圧が存在するところではいずこにも生み出されがちな問題である。じっさい、水俣でも、抑圧移譲は、チッソの企業城下町あるいは先住者と天草などからの流入者との軋轢といった特殊的要因を超えて、チッソの社員と工員、臨時工や下請け労働者といった諸所に遍在する要因をも連鎖の一環とする重畳構造の内で現われ出ていたのであった。

だが、三大階級に抽象化した資本主義分析では、被抑圧者間での抑圧移譲という問題は捉えられえない。資本主義経済システムが搾取、したがって利害対立と抑圧とを自らの本質的契機として内包するシステムであるにもかかわらずである。この点では、むしろ、政治学や心理学、さらに社会学などから学ぶべきものが多々存在していよう。だからこそ、それら隣接諸科学との連携は、資本主義経済システムのより具体的な考察を行う理論次元のみならず、むしろこの経済システムの本質を対象とする原理論の次元において、積極的に試みられるべきではなかろうか。石田氏が最後に提起している問題の普遍性、重要性に接するにつけ、そうした思いはいっそう深くなる。

すなわち、石田氏は、水俣における抑圧と差別の連鎖を、「逐次抑圧をより下のものに移譲し、末端が最大の圧力を受ける」という「ドミノ現象」と

9）たとえば、原田正純『水俣が映す世界』日本評論社、1989年、見田宗介『現代社会の理論』第二章、岩波新書、1996年、丸山定巳他編『水俣からの想像力』、熊本出版文化会館、2005年、など参照。
なお、チッソ株式会社への社名変更は1965年で、水俣病が顕在化した当時は新日本窒素株式会社であるが、本稿では統一的にチッソと表記する。

10）石田雄「水俣における抑圧と差別の構造」色川大吉編『新編 水俣の啓示』筑摩書房、1995年、所収、63－67ページ参照。

見たてたうえで、水俣のそれが「日本の縮図」であるとすれば、「すべての日本人が抑圧の連鎖のどこかに位置している筈」であることを想い起こさせる。とともに、さらに「そのドミノは日本の国境をこえて第三世界まで及んでいる」ことを指摘する。そのうえで、この抑圧のドミノに無感覚なのは、満員電車で自らが隣の人に体重をあずけることで、無自覚なうちに自らが受けている圧力を移譲しているようなものであること、だからこそ「最後に電車の隅でつぶされようとする人」に想像力を働かせて、その人に「かかる圧力を少なくする」ことが私たちにとって緊要の課題であることを訴えているのである[11]。

水俣病から学ぶべきもうひとつの論点は、経済・社会システムという用語の射程に関わってくる。マルクス派経済学が経済・社会システムのシステム的、構造的特性に鋭い関心を払うと言われるとき、この用語によって念頭に置かれてきたのは資本主義経済システムや社会主義経済システムという「体制」、あるいはそうした体制の下でのサブ・システム的な諸制度であった。だが、地球の環境容量が問われるまでに至った現代においては、そうしたシステムのみならず、主客を峻別し、自然をもっぱら客体視するコスモロジーを体現した近代科学＝技術を駆使して「豊かさ」をもたらしてきた「近代世界」もまた、歴史のある段階に登場した特殊な経済・社会システムとしてその特質を突き詰めて検討されて然るべきではないであろうか。こうしたことをあらためて尖鋭に教えてくれるのが、石牟礼道子『苦海浄土』に依りつつ「民衆の自然」のあり方を解き明かす高木仁三郎氏の所説であり、また自ら未認定患者であった緒方正人氏の述懐である。

まず、高木氏は、石牟礼道子氏の『苦海浄土』第三章「ゆき女きき書き」及び第四章「天の魚」からそれぞれ印象的な叙述を取り上げ、そこに展開されている人間と自然との関係に「近代を超える精神」を読み取っている[12]。いずれも夫婦で漁をしていた頃の回顧談であるが、前者では、漁場で「ほーい、ほい、きょうもまた来たぞい」と魚に声をかけて漁を始めたり、「おまやもううち家（げ）の舟にあがってからはうち家（げ）の者じゃけん、ちゃあんと入っとれちゅうと、よそむくような目つきして、すねてあまえるとじゃけん」と、捕獲したタコと愛しくつきあってきた日々を懐かしく振り返る女性の話が描かれている。ここには、「駄々こねて」壺からなかなか出てこなかったり、出てきたかと思うと舟の上を逃げ回るタコの様子が、「その逃げ足の早さ、早さ。ようも八本足のもつれもせずに良う交して、つうつう走りよる。こっちも舟がひっくり返るくらいに追っかけて」とユーモラスに描かれてもいる。それに対して後者では、大漁を「よんべはえらいエベスさまの、われわれが舟についとらしたわい」と感謝するのみならず、夜通しの大働きに疲れて早く帰りたいときに凪で風がとまって舟を走らせられなくなってもなんら苛つくことなく、むしろ、釣ったなかで「いちばん気に入った」鯛と「沖のうつくしか潮で炊いた米の飯」と焼酎を夫婦で楽しんだ後に、ひと眠りして風を待つ漁師の様子が描かれている。しかも、かの漁師はその間にも、「空は唐天竺までにも広がっとるげな」と空の広さに感慨を覚え、潮に流される舟にも「唐じゃろと天竺じゃろと流れてゆけばよい」と悠然とかまえている。ここには、「すべての進行が陰に陽に不知火海の存在を基底にし、そのうえに漂うように行われていく」と高木氏が指摘している『苦海浄土』の世界の特性が、ひときわ明瞭に読み取れよう。さらに、いずれの逸話においても、「魚はとれすぎるということもなく、節度あ

11）同上論文、85−86ページ参照。

12）高木仁三郎『いま自然をどうみるか』白水社、1985年、196ページ以下参照。

13）高木氏、同上書、197−201ページ、及び石牟礼道子『苦海浄土』講談社文庫、1972年、129−132、185−189ページを参照。

14）高木氏、同上書、201、203−204ページ参照。

15）緒方正人『チッソは私であった』葦書房、2001年。40−41, 54−58ページ。また、8−9、63, 150−154ページなどをも参照。なお、こうした告発は、

る漁の日々が過ぎた」あるいは「天のくれらすもんを、ただで、わが要ると思うしことって、その日を暮らす。これより上の栄華のどこにゆけばあろうかい」と、しゃにむに量的拡大を追う行き方とは異質なライフスタイルが表現されているのも印象深い[13]。

こうした逸話を通して、高木氏は、まず、上述のような『苦海浄土』の世界を貫くリズムに顕現する「生命の流れ」、さらに言えばそうした「根源的自然」ないし「生命の確かな存在感」がわれわれの魂に及ぼす作用に触れつつ、「民衆的な地平からいま自然をみる、ということの意味」ないし「民衆の生と生活にとって、自然とはいかなるものでありうるのか」を、汲み取ろうとしている。

さらに、そこから汲み取りうるものをより確かなものとすべく、上述のような世界が「私たちをほっとさせ、やすらぎを与えてくれる」所以を追求する。そして、それが「何よりもそこに展開されている、海・人・魚・舟のやりとりの妙」に由来することを見出す。曰く、「自然と人間の交感が根源的なレベルに達するとき、そこにはおかしみさえ生まれるような、やさしい関係が成立」する。あるいは、漁師にとって「生きるための生業（なりわい）」であるものが、同時に「強く遊びの要素」を伴っており、しかもそのことによって「自然と人間との一方通行でない関係が成立し、驚くほど自由で柔軟な境地が実現」している、と。こうした契機が見出されるからこそ、かの逸話は「近代以前へと立ち戻ることに終わるのではなく、近代を串刺しにしてつき破る力」をもつと高木氏は解しているのである[14]。

それに対して、緒方氏は、自らの半生を振り返りながら、水俣病闘争が裁判や認定申請という「制度の中での手続き的な運動」に陥ってしまったことに感じたもどかしさを突き詰めてゆく。そして、たとえば交通事故には自動車保険というように、「世の中は、問題が起きるとそれを処理する仕組みを作ることだけには懸命」で、そのあげくあらゆることが「医療制度の問題やお金を払えばいいんでしょ」ということになって、「責任というのが、制度化」されてしまい、「人間の責任という一番大事なものが抜け落ちて」いっていること、換言すれば「率直に事実を認め、心から詫びる」といったことが忘れ去られ、「魂のゆくえがないがしろにされている時代」であることを告発するに至る[15]。しかも、この最後の一文は、水俣病の「構造的な」性格を追求し、「システムの責任」を明らかにしてゆくときに陥りがちな不徹底さへの警鐘ともなっている。

すなわち、「心からのお詫び」を求めているのにそれが「システムの責任」といういわばブラックボックスに飲み込まれるだけという状態に苛立った緒方氏は、やがて「お前はどうなんだ」と自問することとなる。そして、自分がチッソの幹部や労働者であったとしたらと立場を逆転してみたとき、「お金が支配している社会」のもとで儲かって仕方がない状態の誘惑に抗しえたかと首を傾げ、少なくとも、企業城下町において内部告発などした場合に押し寄せてくる圧力をはね除けえた自信はないことに気づく。つまり、チッソの労働者、ひいては幹部と同じことをしてしまったのではないかと気づき、うろたえ、まさに狂うほどに苦悩する。そのさい、うえの自問は、チッソが生産しているようなさまざまな化学製品に囲まれて「豊かな」生活を享受している自らのライフスタイルの再審へとも深まってゆく。「“豊かさ”に駆り立てられた時代」という「時代の価値観が構造的に組み込まれている」世の中に自らも取り込まれていたのではないか、その意味で、

「制度の中で闘い、制度を要求する闘いの中で……
それぞれの『個』がなかなか見えなくなってきた」
被害者運動にも向けられ、それぞれの人が
「そこで苦闘し、あるいは意思決定するという場面を、
私たちや支援運動や弁護士が替わりに
やってしまった」のではないかという反省をも導いている。

同上書、58−59ページ。ちなみに、「人間の責任という一番大事なものが抜け落ちて」いっていることへのこだわりは、川本輝夫氏ら自主交渉派が共有した問題意識でもある。

「時代の中ではすでに私たちも『もうひとりのチッソ』」だったのではないか[16]、と。

緒方氏の場合、この近代的ライフスタイルの再審は、さらに、魚介や小動物など「命あるものをとってきて食うとったわりには、まだ詫びをいれとらんかった」という、自然とのつきあい方への反省へと向かう[17]。これは、自然をひたすら客体視する近代的コスモロジーの問い直しにほかならない。緒方氏による近代的消費生活の側からのアプローチは、既述したような高木氏による労働の側からのアプローチと相呼応しながら「近代システム」を人間と自然との関係という根源的なところで問い直す地点へと、展開していっているのである。

この緒方氏の最後の到達点は、マルクスにあっては「人間と自然との非和解性」[18]という論点と重なって、軽々に解答を得られるものではないであろう。ともあれ、水俣病の「システム性」ないし「構造性」を問うということは、価値増殖をなによりの駆動力とする資本主義経済システムやそれを極端に体現したチッソの企業体質[19]、また高度経済成長期の日本の国家的経済戦略、あるいは水俣の企業城下町的体質といった「生産世界」の側の「構造」を問うだけでは不徹底であること、換言すれば、近代的な「豊かな」社会とはどのような社会なのか、そこに暮らす自らはどのような存在なのかを問い直さないかぎり、あなたに水俣病の構造性を告発する資格はあるのか、むしろあなたも大なり小なりあなたが告発している「生産世界」の構造と表裏一体の存在ではないのかと逆告発されてうろたえざるをえないということを、私たちは緒方氏の経験から真摯に学ぶべきであろう。

このように現代社会における「自らの存在」を問い直すことは、石田氏の言う抑圧ドミノのなかでの自らの位置を問うことにも通じる。じっさい、緒方氏もまた、「本当の自分」を問うことのなかから、「戦争の問題を考えるようになり、沖縄や広島・長崎の問題も少しわかるようになり」と、水俣病と戦争や広島・長崎の問題が「どうも別の問題じゃない」と気づいたり、「日本国内だけじゃなくて、あちこちで起きる民族同士の対立の問題や宗教戦争」などについても考えるようになったと述壊している[20]。

Ⅳ マルクス派社会経済学への脱皮に向けて

前節でも触れたように、旧来のマルクス派経済学は、抑圧移譲を資本主義的市場経済システムの本質を解析するその基礎理論の次元で対象化して体系的に解明してゆく用意をもってはいなかった。また、資本主義か社会主義かといった体制を超えて「近代」を問い直すという問題意識も備えていなかった。それらはマルクス派経済学の本源的欠陥であり、環境問題に取り組むとすればもはやマルクス派経済学にこだわるべきではないことを示唆しているのであろうか。それとも、マルクス派経済学には、上述のような2点を考究するうえでも、なお注目に値するところが残されているのであろうか。

前者の抑圧移譲という論点について言えば、マルクス派経済学のうちにはそれを資本主義的市場経済システムの本質に関わらせて、したがって

16)「心からのお詫び」は「自らの」事件との関わりを明確に自覚することを前提とするし、そのためには「自らがなにもの」であるかを顧みなければならなかったということであろう。同上書、42−45, 46−49ページなど参照。

17)同上書、48ページ。さらに、64−71、93−100、178−180ページなどをも参照。

18)中期マルクスの労作『経済学批判要綱』からこうした自然観を掘り起こし、注目を喚起したのは、周知のように、A,シュミット、元浜清海訳『マルクスの自然概念』法政大学出版局であった。ちなみに、シュミットは、この概念に依拠して、ヘーゲルの観念論と労働を基軸としたマルクスの史的唯物論との相違を際立たせようとしている。

構造論的関心にとって注目すべきかたちで、体系的に取り扱うための契機が抱懐されていたと筆者は解している。

すなわち、既にしばしば論じてきたところであるのでもはや詳しくは繰り返さないが、まず、マルクスが未完のままに遺した価値−生産価格論を適正に再構築すれば、資本主義的市場経済システムは、サブ・システムに固有の論理をそれなりに利用ないしそれらと妥協しながら自らのうちに包摂しうるメタ・システムであることを明らかにすることができる。さらに、宇野弘蔵氏が私的主体による社会の編成という市場経済システムの孕む本質的緊張関係に鋭く着目して鮮やかに刷新した価値尺度論を、均衡価格をもたらすメカニズムとしての「伸び縮みする物差し」論という量的側面に留まらせず、私的主体がそれぞれの置かれた社会環境等を背景に私的判断で持ち込むがゆえに、質的にもバラツキをもつ物差しの売買過程を通じた集約論へと展開させれば、量的側面で均衡価格がじつは一物一価に照応するような一点に収斂するものではなくて、むしろ蚊柱状の価格運動の重心をなすものとして把握されてくるように、物差しの質もまた決してひとつに収斂させられるものではなく、むしろ複数の異質な物差しの並存を許容するものであることが明らかとなってくる。こうして、資本主義的市場経済システムのメタ・システム性は、単にそのようないわば懐の深さを備えた器であることに留まるのではなく、そのうちに異質な論理を帯びたサブ・システムという内容がたしかに現実に包摂されるものであることが明らかとなるというわけである[21]。

じっさい、たとえば、男女の近代的[22]役割分業意識を前提とすれば、男性が持ち込む労働力商品に適用される物差しと女性の労働力商品に適用される物差しとは異質なものとなる。そして、それを資本の側で拒絶する理由はない。むしろ、幸便と受け入れ、女性労働力を搾取することとなる。労働力商品が随伴するジェンダー意識というサブ・システムが備える固有の論理は、資本主義的市場経済システムの内に包摂され、構造的に再生産されてゆくこととなるのである。

こうした認識を、労使関係には利害の対立が内包され、支配・被支配ないし管理・被管理という問題が孕まれていること、しかも労働力という商品は意識をもつという独特の性格を帯びた商品であることと絡めるならば、資本の側としては労働力商品を分断したいし、そのために利用できるものは積極的に利用することも、まさに資本主義的市場経済システムの本性として捉えられることとなる。うえに触れたジェンダー問題に即せば、女性労働力は単に安価に雇用されるというだけでなく、非正規労働者として、身分的に差別された存在として資本主義的市場経済システムのうちに包摂されることとなるわけである。そこには、当然、抑圧移譲といった問題も随伴される。そして、こうした労働力商品の分断化の契機として利用されうる要素はジェンダー意識に限られるものではないこと、あらためて断るまでもないであろう。むしろ、資本主義的市場経済システムは、力関係が許すなら親企業と下請け、さらにそうした関係の重畳を創り出してヒエラルキー化することで、そうした契機を自ら生み出す本性を備えていると解されるべきである。

19）たとえば、石田氏、前掲論文、51ページ以下、さらに同論文を所収した色川大吉編『新編 水俣の啓示』第6章、第7章など参照。

20）緒方氏、前掲書、131ページ。

21）拙著『価値論のポテンシャル』昭和堂、1991年、拙論「『価値形態論の見直しのために』再論」『彦根論叢』第331号、2001年、57ページ以下、など参照

22）現代の女性差別を、前近代的遺制としてではなく、むしろ資本主義経済システムの下でまさに近代的に再生産されているものと捉えて、そうした女性差別の近代的機制を打破しない限り、現代社会における女性解放はありえないことを喝破したのが、第2波フェミニズムである。

こうして、環境問題のうちにあらわれてくる抑圧移譲も、環境問題という具体的次元でたまたま特殊的に現れてくるものとしてではなく、むしろ資本主義的経済システムの本性に通じるものとして把握されることとなる。そしてそのことは、石田氏が提起していたように、資本主義経済システムをグローバルな重層的システムとして把捉することにも通じてゆく。

他方で、「近代」を問い直すという第2の論点に目を向けると、まず、人間と自然との関係において、マルクスが近代科学＝技術の行く末に楽観的すぎたことは否めない。そこには、史的唯物論に基づくがゆえに、生産力の発展、したがってその原動力としての近代科学＝技術に対する期待が大きかったことが作用していよう。と同時に、若き日の『経済学・哲学草稿』に示されたような人間観が、楽観論を基底において支えていたところがあるようにも思われる。

すなわち、周知のように同書においては、人間の本質は「類的存在」であることに求められていた。そしてそこには、人間は意識を高度に発達させた存在であり、本能に規定されて対象に一面的にしか働きかけえない動物とは異なって、対象の本質すなわちそれを「類」として束ねる性質を理解しうる存在という含意が込められていた。したがって、人間は対象を理解し、対象の本質を活かすようなかたちで対象に働きかけることができると認識されていた。つまり、人間は本来的には、換言すれば資本主義的経済システムの下での疎外から脱するならば、自然と共生的な存在であると把握されていたのである[23]。

ここには、現代の環境倫理学において問われているような人間中心主義への危惧も、原子力開発に象徴されるような巨大科学＝技術あるいは遺伝子工学のような現代の先端科学＝技術が孕みうる陥穽への警戒感もうかがわれない。そもそも、19世紀の半ばに生きたマルクスにそうした近代科学＝技術認識を求めること自体、酷と言うべきかもしれない。さらに、マルクスの中期の著作『経済学批判要綱』には、「人間と自然との非和解性」という、初期の人間＝自然把握とは異質な認識、前節でみた緒方氏の到達点に通ずる認識も展開されている[24]。この認識が後期のマルクス、たとえば『資本論』のなかにどこまで定着しているのか必ずしも定かとは言えないが、人間がほんとうに人間中心主義を脱しうるのかといった問いをも射程に、人間と自然との関係をその本来的緊張関係の下で考究するという点で、魅力的な契機をマルクスの思想が秘めていたことはいちおう確認できる。

いずれにせよ、巨大科学＝技術や現代の先端的科学＝技術が孕みうる陥穽に対する警戒感であれ、『経済学・哲学草稿』や『経済学批判要綱』におけるマルクスの人間＝自然観であれ、人間と自然とを主体・客体として峻別する近代的コスモ

23）K.マルクス、城塚登/田中吉六訳『経済学・哲学草稿』岩波文庫、93−97ページ参照。
さらに、H.マルクーゼ、良知力/池田優三訳『改訳版 初期マルクス研究』未来社、30−31ページ参照。

24）『経済学批判要綱』のこうした自然観を、マルクスの生産力概念の質の問題として掘り下げた注目すべき労作に、山田鋭夫『経済学批判の近代像』有斐閣、1985年、がある。山田氏は、マルクスの生産力概念の社会的性格を剔抉しつつ、マルクスを性急に単純な生産力主義者には還元しえないことを説いており、人間と自然との非和解性という認識を受けて、「自然と人間文化との危ない関係をそれとして醒めた眼で自覚しつづけ、これを徹底的に引き受けつづけること、および、人間と自然との間の──生産的＝道具的でない──多様な関連を掘りおこし、享受していくこと」という魅力的な提言を行っている。だが、その山田氏もまた、「『要綱』はこれについてあまり語らない」ことを、さらにマルクスのうちに「近代の産業的生産力の延長上に未来を構想する視角がないとは言い切れない」と認めている。133、135−136ページ参照。

25）たとえば、浅見克彦氏は、マルクス派経済学が使用価値を考察対象外に留めおいたことで、消費世界が体制を安定化させる権力作用を保持していることをも盲点としてしまっていることを厳しく批判し、ボードリヤール説をカルチュラル・スタディーズの視角から補完しながら、

ロジーを問い直すという論点に通じるものであり、狭く経済学に閉じこもって対処しうる問題ではない。しかも、自然との関係、したがってそうした問題への一定の了解を携えずに経済現象について論じ得ないところまで、現代の経済活動は肥大化してしまっている。さらに、緒方説に明らかなように、そうした問題は現代的消費生活ないしライフスタイルとも不可分な関係にある。学際的に開かれた経済学が要請される所以である。

そこで、緒方説とも直結する、「豊かな」社会における消費者の変容、ひいては社会の変容に目を向けてみよう。既述のように、従来のマルクス派経済学は、商品の使用価値を経済システムの社会的構造性に関わる歴史性を帯びた属性とは捉えず、現代的消費生活の特質に体系的に接近する術を失ってしまっていた[25)]。

だが、ボードリヤールが明らかにしたように、現代の「豊かな」社会の消費者が商品に求めるものは、もはや商品の物的機能としての使用価値のみではない。むしろ、当該商品が諸商品の群れの中でどのような位置を占めているか、換言すれば当該商品の他の諸商品との関係性こそが、消費者にとってより大きな関心事となっている。或る商品をもつことが社会的にはどのような意味を帯びることになるか、他者からどのようなまなざしで見られることになるかが、つまり当該商品が社会的に帯びる意味こそがその商品のいわば現代的使用価値なのである。たとえば、或る種のクルマは移動手段であるばかりではなく、この社会におけるそれなりの豊かさを実感させるものであったり、権威を示すものであったり、あるいはライフスタイルを含めたセンスの良さや自らの個性をアピールできるものであったりする存在というわけである。したがってまた、そうしたクルマに取って替わりうるものは必ずしも他種のクルマであるわけではない。むしろ、まったく異質の物的機能を備えた、たとえばインテリアであったり、ファッションであったりというものが、当該のクルマに取って替わりうる競争者であったりする[26)]。

このように、商品の現代的使用価値はきわめて社会的なものである。端的に言えば、現代の商品は「消費者のアイデンティティを社会のなかに定位させるコミュニケーション用具」[27)]なのである。しかも、このように使用価値が変容[28)]してしまったことは、やはりボードリヤールが明らかにしたとおり、社会のあり方そのものにも大きなインパクトを与えている。すなわち、上述のような、社会的に帯びる意味としての商品の使用価値は、きわめて移ろいやすいものである。たとえば、センスの良さをアピールできる商品はまさにそのように社会的に評価されるがゆえに多くの人々が求めるところとなり、やがて平凡なものへと化してゆく。こうして、次にそれと取って替わる新たなセンスの良さの体現商品の出現が求められることとなる。さらに、同種の商

資本主義的企業、消費者、マスコミの共犯関係、
とくに後二者のそれに鋭いメスを加えている。
浅見克彦『消費・戯れ・権力』社会評論社、2002年。

26) J.ボードリヤール、今村仁司/塚原史訳『消費社会の神話と構造』普及版、紀伊國屋書店、11−29、38−46、48−51、67−76、86−91、93、119−121ページなど参照。

27) 吉見俊哉「消費社会論の系譜と現在」
井上俊/吉見俊哉他編『岩波講座 現代社会学21
デザイン・モード・ファッション』1996年、所収、215ページ。

28) 使用価値は、元来、単なる物質的機能に
還元されるものではなく、むしろ大なり小なり
「消費者のアイデンティティを社会のなかに定位させる
コミュニケーション用具」としての機能のうちにも
求められていた。このことを、世界の「身分け」と
「言分け」という概念を用い、文化は人間の動物的生存の
必要性に関わる「身分け」を超えた、余剰のうちにこそ
育まれてきたことをあらためて想起させるなかで、
巧みに教えているものとして、丸山圭三郎
『フェティシズムと快楽』紀伊國屋書店、1986年、がある。
したがって、現代における使用価値の「変容」は、使用価値が
そうしたコミュニケーションの道具としての機能を
帯びるようになったことにあるのではなく、そうした機能が
異常に肥大化したところにある。同書、第1章、第2章など参照。

品でありながら平凡なものに堕さないために、微妙な差異が生み出されてゆく。こうして、人々は次々と生み出される大量の商品の海を漂流することとなってしまう。しかも、そこには、長期間の愛用品に見られるような人と商品との深いつながりはない。自らがその商品をどう見るかよりも、他者がどう見るかが問題であり、しかもその他者のまなざしは上述のように気紛れに変化してゆくものなのである。こうした状況は、記号というものがその指示対象と内的連関をもつものではなく、むしろ指示対象を他の諸物と差異化して諸物全体が構成する関係の網の目の中に定位させられればよいことに類比できよう。現代の消費社会はまさに記号消費という消費スタイルが支配する世界なのである[29)]。

しかも、こうした状況はモノとしての商品の消費に留まらない。知識や教養といったものも、或る時期知っておればよい、だからまた深くその背景や他の事象についての知識とのつながりを追求したり、掘り下げたりする必要のない、むしろ浅く広く知っていることが望ましい情報として次々と消費されるものへと化してしまう。ちょうど、モノとしての商品が、豊かさや権威あるいはセンスの良さをアピールするという積極的な意味を帯びて消費されるより、それを持たないと貧しく見えたり、センスが悪いと見られるのを避けたい、要するに社会的に「一人前でない」と見られるのを避けたいからそれを消費せざるをえないというように、知識や教養もそれを知っていないと現代人じゃない、他者との会話にもうまく加われないといったハンディを負うことを避けるために知っておくべき情報として、消費されてゆくのである[30)]。

こうなると、社会の現実もまた、リアリティを失ってフィクション化してゆく。もう少し言えば、たえず入れ替えられてゆく、社会的に一人前とみなされるための消費財セットの購入を強制されることにストレスをためる消費者にとって、それを解消する場が必要とされる。そこには軽い暴力性も潜むこととなる。それが、自分でなくてよかったという安堵感を伴いながら他人の不幸を我が喜びとする「三面記事」的なニュースの享受であったりする。しかもそれは、「三面」という軽さでもって、つまり自らは安全地帯にいながら、事故や災害、場合によっては戦場さえ、あたかもその場に居合わせたかのように体験させてくれるものでなければならない。まさに、そうした災害や戦場がじつは我が身にも大なり小なり関わってくる現実であるといった認識にまで深められることのない、いわば刺激として、享受されなければならないのである[31)]。

こうして、あらゆるものがたえず入れ替えられる関係性のひとこまと化し、財と人との内的関連が希薄化して、むしろ人々がそうした関係性のはかない担い手としての財と戯れるようになるところで、バーチャルリアリティが新たなリアリティを構成し、シミュレーション社会が実現する[32)]。だからまた、なにごとにも既視感を覚えて容易に心を動かされることがなくなる。逆に、そうだからこそ、昨今の我が国におけるように、やたらと「感動」したがることともなるのである。

29）少し敷衍すれば、同じく財の物理的機能より財の帯びる社会的意味に注目するものに象徴的消費がある。だが、これはむしろ人ないし社会とモノとのいわば魂の次元での結びつきを内実とするものであって、──バタイユ的に言えば、手段としてではなくそれ自体が目的とされる行為──、人とモノとの結びつきの恣意性、はかなさを内実とする記号消費とは決定的に異なる。経済理論学会第58回大会（於 関西大学、2010年10月）において本稿の骨子を報告した際、斉藤日出治氏が、ボードリヤール説のエッセンスは後者を参照基準とした現代消費社会の特質の剔抉にあることをコメントくださった。筆者は、『生産の鏡』などを意識しつつ、注**34**）に触れたように生産世界からの規制の終焉というボードリヤールの認識をやはり注視したいが、ボードリヤール説においてたしかに象徴的消費との対比が強く意識されていることは確認しておきたい。

30）ボードリヤール、前掲邦訳、13−20、25−29、67−71、119−125、135−144、152−160、173−186ページなど参照。

31）社会的強制としての消費が随伴するストレスが生み出す「アノミー」としては、さらに不条理な暴力性、サブカルチャーへの逃避や疲労もある。同上邦訳、266ページ以下参照。

このように、消費世界の変容は社会全体のあり方に大きな影響を及ぼしており、社会構造的関心事の枠外のものといったわけでは決してない。むしろ、それにメスを加えることが現代社会の理解にとって必須となっている[33]。

但し、こうしたボードリヤールによる現代社会の解析も、かつての社会とは変化して消費世界のあり方こそが現代社会を規定する最重要要素となったことを強調するあまり、生産世界との連関を捨象してしまうと一面的となる[34]。

たとえば、このように膨大な差異を次々と生み出す多品種少量生産のプロセスは、生産ラインに従事する労働者に対して、さらに商品開発に携わる技術者や流通過程で販売を管理する労働者に対して、大きな負荷を与えている。そうした労働者はもはやアフターファイブや休日に知識や教養を追求する気にはなりがたいであろう。むしろ、軽くて感覚的に楽しめるモノ、たとえばスポーツや音楽であったり、クルマやファッションであったり、あるいはグルメやセクシュアルな写真、映像であったりというものを手近な消費対象として、疲れやストレスを癒すこととなる。そして、そもそもアフターファイブや休日をほんとうに仕事から離れてプライベートな楽しみに費やせるのか、むしろ情報機器に代表されるように、次々と導入されてゆく職場の技術革新に落ちこぼれないように自己研鑽に励まなければならなくなっているのではないかといったことを含めて、生産世界においてどのような負荷が嵩じているかの考察という点では、マルクス派経済学はこれまでそれなりに豊かな蓄積を積んできた。

のみならず、じつはマルクス自身には、消費世界を対象としたちょっと興味深い社会経済学的考察も遺されている。すなわち、『経済学・哲学草稿』での労働疎外論はよく知られているところであるが、同時期に著された「ミル評注」においては、同じ人間観を駆使することで市場経済システムの下での消費世界における人間疎外が考察されている。

すなわち、「ミル評注」では、貨幣が支配する市場経済システムの下では、消費者の内的欲求に基づく声、人間的交流を求める声はもはや通じず、消費者は単なる貨幣の持参者としての匿名の存在へと抽象化されてしまうという事態の批判的考察がなされているのであるが、そうした考察の基底には次のような消費世界についての認識が伏在していた。意識を高度に発達させた人間にとって、労働が本来的には自己実現、自己練磨の営みであるように、消費もまたそうした営みとしての性質を備えている。だとすれば、或る財を欲することは、自己が自己たらんとして欠いているものを求めること、自らの本質の実現に不可欠なものを求めることにほかならない。したがって、そうしたものを提供してくれる生産者は、消費者にとって自らの本質の実現に不可欠の大切な存在ということになる。生産者からすれば、そうした消費者との関わりのうちに、自らに感謝と親愛の情をもって接してくれる他者の存在を感じとれるという喜びを味わえることになる[35]、と。

32）注**30**）で指示した箇所の他、ボードリヤール、今村仁司訳『象徴交換と死』ちくま文庫、29ページなどをも参照。

33）消費社会論の系譜におけるボードリヤールの位置づけについては、たとえば、吉見氏、前掲論文を参照。

34）ボードリヤールが生産世界からの規制の終焉を強く意識し、それと連関させて脱出口を把捉しようとしていることについては、拙稿「『豊かな』社会の社会経済学的解析に向けて」『彦根論叢』第356号、2006年、121−122ページでも触れた。但し、『消費社会の神話と構造』では、「意味作用とコードの歴史的生産」の分析は、「モノと技術の生産過程についての分析に結びつかねばならない」とも述べられ、ガルブレイスが近代の工場制生産過程において「労働者が受けた時間と行動に関する訓練の発展の論理的帰結」として「消費過程に強制された文化変容」を解明していることを、「なかなか魅力的」とも評している。前掲邦訳、23、88ページなどを参照。

35）マルクス、杉原四郎/重田晃一訳『経済学ノート』未来社、100、112−118ページなど参照。

こうしたマルクスの消費世界観は、消費対象を他の諸消費対象との関係においてではなく、消費者との直接的関係において捉えるものであって、「豊かな」社会における消費世界を解析するツールとしては素朴に過ぎるところもあろう。だが、現代日本の消費社会を「セツナ・さ」をキーワードに、すなわち「刹那」性とともに「切なさ」つまり「人に対して想いをはせること」への希求をキーワードに読み解く試みが有力広告代理店によって提示されていることからもわかるように[36]、マルクスが描いた本来的な消費世界における人間関係のあり方は単純に過去の遺物とばかりは言い切れない。むしろ、現代の消費世界からの脱出口を、ボードリヤールや浅見克彦氏のようにこの世界の亢進の極に招来される破綻に求める[37]のとは異質な方向もありうることを示唆するものとして興味深い。

こうして、ボードリヤールの切り開いた消費世界の解析を生産世界の考察と接合しながら、トータルに現代社会の構造性を読み解いていくこと、ここにはなおマルクス派経済学が貢献しうる領域が少なからず残されていると解される。のみならず、既述の、市場では複数の価値尺度ないし物差しの質が併存しているという認識を応用すれば、市場経済システムには異質の物差しがそれぞれに主として用いられる複数の市場圏の重層的構造体という側面もあることが見えてくる。だとすれば、相対的に環境にやさしい物差しを用いる市場圏をしだいに膨らませることによって重層的市場圏全体の性格を少しずつ変革してゆくといった戦略の可能性も展望されてくる。また、主流派経済学の「最適化」を求めるという手法に対する、既述の経済構造論的視点に発する批判と近代的自然観に対する反省を絡めれば、玉野井氏のように[38]、満足原理すなわち生産力至上主義ないし効率至上主義からの離脱を掲げ、さらにはバナキュラーな価値の再生を求めることも展望されてこよう。但し、そのためには、マルクス派経済学自身が学際的に開かれた、柔軟な社会経済学へとまず脱皮する必要があるというわけである。

36）電通ヤング＆ルビカム・アバス（株）
マーケティング局編著『セツナ・さ・世代！』
ダイヤモンド社、1990年。
なお、「セツナ」に込められた二重の意味については、
14−19ページを参照。

37）浅見氏が記号消費化の極に脱出口を
展望していることについては、上掲拙稿、
122−125ページ参照。

38）玉野井芳郎『玉野井芳郎著作集② 生命系の
経済に向けて』学陽書房、1990年、を参照。

A Consideration on Developing Socio-economical Approach to Environmental Issues Based on Marxian Economics

Naoki Umezawa

Though environmental economics has relatively short history, now a days it becomes an indispensable part of modern economics. But environmental economics in main stream has a crucial weak point, I suppose. Namely it underestimates structural influences from economic & social system. On this point approaches based on Marxian economics seem to have inherent advantage because this school emphasizes their special concern for structural influences. But actually Marxian economics is also insufficient to tackle with modern environmental issues since it has developed as too narrow closed system of pure economics. In this paper firstly I confirm this point by reflecting the famous case of Minamata disease. Then I will examine whether Marxian economics has possibility to change into social economics as the base for one of the effective approach to tackle with modern environmental issues. I will also point out what theoretical fields Marxian economics should pursue to change itself.